巻頭言

「教える」から「互いに育ち合う」関係へ

日本作業療法教育研究会副会長
秋田大学医学部保健学科作業療法学専攻
湯浅　孝男

少子化による高等教育のユニバーサル化は今後ますます進み，学力低下や学習意欲の乏しい学生の増加は教師であるかぎり避けることのできない教育環境の変化であろう．現に私は今も授業にのってこない一部の学生のことが頭から離れない．「私はなぜ教職に就いたのだろうか」という問いにぶつかる．

教師であるからには担当する教科における知識や技術はもっている．そして教える方法や技術についても頑張って工夫しているつもりだ．そして大半の学生は私の努力に応えてくれている．自分が身につけてきた知識･技術の利用や応用の仕方を教える技術モデルといってもいいようなことを示すことで食いついてくる学生に対しては教師としての充実感を私は感じてきた．学習する意欲や目的意識をもっている学生に対しては上手に教えるための技術を身につけることで教職の責任は全うできそうだ．しかし最近，学習する意欲が乏しいのか，目つきや表情が妙に気になる学生の存在が増えてきた．意欲が乏しいというレッテルを貼り付けたくなる彼等に対しては時にはいらだち，あきらめたくなる時がある．彼等を目の前にするとき，自分が教える意図や目的，すなわち教えることで教わる人にどうなってほしいと自分は願っているのかという問いにぶつかる．旧来の「教える」関係から転換し，教師と学生が共同でやる気の起こらない現実に向かうという「互いに育ち合う」関係が必要な気がする．思うようにならない現実にどう対応するかわからず，ふてくされたりあきらめている人に呼びかけ語りかけ応答する責任を持つのが学校では教師であり臨床現場ではセラピストだと思う．

伝統的な規範的教育学（pedagogy＝子どもを導く術）からの脱却を目指す臨床教育学という領域が最近できてきている．臨床教育学がどのような学問であるかを一言では言えないが，「あるべき姿を探求する」ことよりも「教育関係がどのようにあるかを個別的・具体的な事実に即して探求する」ことを目指している領域といえるだろう．この視点は作業療法と共通するものがある．養成校では作業療法の教育研究者と教育者は一致するから，教育のフィールドを反省することから理論が生成され，実践で確かめられるというダイナミックな場が生成される．そしてその教師と学生という二つの生が関わり合う教育の場は作業療法の場といっていいのではないか．

「私はなぜ教職に就いたのだろうか」という自問から出発したが，教職は研究者・教育者・作業療法士の全部を実践できる実に豊かな可能性に満ちた職業だと思う．学生の変化に合わせて自分も変化し続けていきたい．

参考文献：皇 紀夫編著：臨床教育学の生成．玉川大学出版部，2003